

## 編 集 後 記

素晴らしい絵画や彫刻に接するとき、あるいはまた心地よい音楽に触れたとき人々は感激し、喜びを感じる。しかし、そのような受動的にもたらされる喜びは恐らくそれらを創った画家、彫刻家、作曲家の充実感、達成感に比べればはるかに軽微なものだろう。それは人間の喜び、感激の本質は能動的な知的創造 (creation) にあるからに他ならない。筆者は残念ながらそのような才能には恵まれていないためか、芸術における創作の喜びは知らない。しかし、基礎免疫学者であった時代に自分で作業仮説を立て、それを証明するために実験を組み、そしてそれが見事に証明されたときの感激、慣れない英語論文に必死に取り組んだ日々が昨日のようによみがえる。苦勞の末、印刷された論文は丁度、芸術家の作品のように愛しく感じたものである。本学会誌の査読委員を引き受けたときも投稿者と共にそのような喜びを分かち合えれば、と願ったものである。ところが拜命して1年余りを経過したが、正直そのような熱意を感じる投稿論文に遭遇することはまれである。筆者なりに理由を考えてみると、本誌の特徴として、和文であるため、世界的に認知されにくい点(どうしても英文誌が優先される)、そのことと関連して知的興味をかき立てる原著論文が少なく、症例報告に偏りやすい点、さらに専門医、指導医の制度から義務的に投稿する(せざるをえない)点などが挙げられる。いずれも投稿するモチベーションにはネガティブに作用する因子であろう。しかし、考えようによっては本誌こそ本邦の消化器外科学会員の目に最も触れやすく、また症例報告から日常診療における新たな発見、工夫、創意を伝えることができ、さらに和文であることはわが国の医師には理解されやすい利点でもある。

消化器外科医はいずれの施設で勤務するにせよ、日々の診療やその他の業務に追われて、その QOL は低く、ようやく得た余剰時間を科学論文作成に充当することは大変なことであろう。しかし、論文作成は外科手術とは別の知的創造であり、余剰の時間を当てるに値する貴重な作業である。ぜひ、多くの、特に若い世代の会員諸氏に科学論文を作成する愉しみ、知的創造の喜びを知ってほしいと切に願うものである。

(奥野 清隆)